

備 考

(イ) 維持會員新加入

日本金屬工業株式會社(1口) 本溪湖特殊鋼株式會社(2口)
東邦鋼業株式會社(1口) 山陽製鋼株式會社(1口)
株式會社芝浦製作所(1口)

(ロ) 死亡者

役 員

前會長 名譽會員 香 村 小 録 君
監 事 正 會 員 濱 田 彪 君

名譽會員

フリット・ヴェスト君

正 會 員

伊賀 春和君 堀 市次郎君 太田 三吉君 田島勝太郎君
高山 哲夫君 高山 正造君 中山 高亮君 八名 正巳君
山田 直矢君 後藤 正治君 五代 龍作君 小堀 春樹君
阿部 巽君 清岡榮之助君

准 會 員 (○印の方よりは戦死の通知接受せり)

○飯島 醇一君 岩野眞司君 岡田時次郎君 武市 和夫君
塚本 正次君 中田 美巳君 野田 佐吉君 郡司 桂一君
○山地 俊勝君 寺内正太郎君 平野 英雄君 森原 豊君
以上 29 氏を喪ひたるは痛惜の至りなり。尙以上諸氏の訃に接し
ては弔詞を呈し哀悼の意を表せり。

3. 會誌發行及印刷物

- (イ) 本會々誌「鐵と鋼」自第 24 年第 3 號 至第 25 年第 2 號
- (ロ) 講演大會講演大要 春秋 2 回
- (ハ) 鐵鋼關係法規參考資料 1 回

4. 庶務事項

A 第 23 回通常總會 昭和 13 年 4 月 3 日

- (イ) 昭和 12 年度會務報告
- (ロ) 昭和 12 年度收支決算報告
- (ハ) 昭和 13 年度收支豫算報告
- (ニ) 會長 理事 並 評議員 (半數) 改選
- (ホ) 服部賞牌及服部賞金贈呈式
- (ヘ) 香村賞牌贈呈式
- (ト) 俵賞金贈呈式

B 理 事 會

- 1) 入退會者審査承認
- 2) 毎月會務並會計事項審査
- 3) 編輯委員更改委囑
委囑解任 足立 泰雄 長尾 武雄
追加委囑 石田 四郎 銅金 義一 網谷 俊平
齋藤 彌平 志村 繁隆
- 4) 服部博士記念資金委員滿期改選
就任者 委員長 齋藤大吉 幹事 渡邊三郎 松下 長久
吉川晴十 山縣愷介
委 員 今泉嘉一郎 井上 克己 服部 漸
長谷川熊彦 二堂階行健 本多光太郎
水谷 叔彦 河村 曉 川上 義弘
片山謹一郎 景山 齊 俵 國一
村上武次量 梅根常三郎 黒田 泰造
藤井 寛 伍堂 卓雄 荒木 宏

澤村 宏 島岡亮太郎

- 5) 野田文庫委員更改委囑 委員長 齋藤 大吉
委員 水谷 叔彦

- 6) 日本鋼管株式會社寄贈資金委員會委員推薦
決定委員次の通り (イロハ順)

今泉嘉一郎 井村 竹市 井上 克己 石川登喜治
服部 漸 長谷川熊彦 二階堂行健 渡邊 三郎
河村 曉 川上 義弘 俵 國一 田中 清治
村上武次郎 鷗瀨 新五 久保田省三 山縣 愷介
山田良之助 松下 長久 藤井 寛 足立 泰雄
荒木 宏 齋藤 大吉 齋藤 三三 澤村 宏
吉川 晴十 水谷 叔彦 三島 徳七 白石元治郎
鹽澤 正一 尾頭加勢士

- 7) 抄録員更改委囑

次の通り

今村 幸喜 伊木 常世 茨木 正雄 林 三樹男
大原 久之 桶谷 繁雄 垣内富士雄 竹山 和達
高瀬 孝夫 根守 侃 中島 省一 名黒 和孝
南波 伸尙 矢島 忠和 前田 六郎 前田 元三
福田 義民 藤井啓一郎 寺島元三郎 佐藤 忠雄
雀部 高雄 岸本 浩 森永 卓次 森棟 隆弘
茂木 吉治 鈴木千代藏 以上 25 名

以上の内 伊木常世 佐藤忠雄の 2 氏辭任

- 8) 研究部會内規改正 (9 月 7 日)

C 評 議 員 會

- 1) 日本鋼管株式會社寄贈資金取扱規則
- 2) 日本特殊鋼株式會社寄贈資金取扱規則
- 3) 補缺監事選舉 (第 24 回通常總會終了迄就任)
- 4) 監事選舉 (第 24 回通常總會終了後就任)
- 5) 任期滿了評議員候補者推薦
- 6) 昭和 13 年度收支決算
- 7) 昭和 14 年度收支豫算
- 8) 香村賞牌受領者選定 受領者 海野三朗君
- 9) 渡邊賞受領者選定
賞牌受領者 村 上 武 次 郎 君
賞金受領者 佐々木吉備三郎君
- 10) 俵賞金受領者選定
學術上優秀論文 多賀谷正義君
「鑄鐵の腐蝕現象(第 3 報)」鐵と鋼第 24 年第 8 號
技術上優秀論文 内川 悟君
「長尺軌條の歴延に就て」鐵と鋼第 24 年第 9 號
- 11) 日本鐵鋼協會關西支部規則

D 編 輯 委 員 會

- 1) 會誌每號掲載原稿審査選定
- 2) 會誌並其他刊行物編輯
- 3) 講演大會・研究部會・臨時講演會等の開催準備並實行
- 4) 鐵鋼要覽編纂

E 服部博士記念資金委員會

- 1) 第 9 回服部賞牌並に賞金受領者選定
賞牌受領者 藤村 哲之君
賞金受領者 石原福太郎君 萩原 巖君 川野 貴一君
高島徳三郎君 長井 盛君 森寺 一雄君

- 2) 服部博士記念資金昭和 13 年度收支決算
- 3) 服部博士記念資金昭和 14 年度收支決算

F 野田文庫委員會

- 1) 購入圖書選定

G 本會日本鋼管株式會社寄贈資金委員會

- 1) 本委員會委員長並に幹事互選

決定
委員長 齋藤 大吉
幹事 渡邊 三郎 河村 驥 田中 清治
山縣 愷介 山田良之助 松下 長久
吉川 晴十 三島 徳七 鹽澤 正一

- 2) 日本鐵鋼協會日本鋼管株式會社寄贈資金取扱規則細則制定
- 3) 熔鑄爐熱勘定研究会開催の件 (昭和 13 年 10 月 日本鐵鋼協會第 18 回研究部會第 1 回燃料經濟部會)
- 2) 鐵鋼關係法規參考資料印刷配布の件

H 鐵鋼要覽編纂委員會

- 1) 鐵鋼要覽印刷基準決定
- 2) 同原稿査閲分擔
- 3) 完成進捗方法

I 官廳關係

- 1) 昭和 12 年度本會事業報告を文部省へ提出 (昭和 13 年 4 月 7 日)
- 2) 本會役員並に資産變更登記 (昭和 13 年 4 月 8 日)

J 事務局異動

鐵鋼要覽編輯助手(圖工) 赤山 榮(昭和 13 年 3 月 10 日採用)
事務局 本田永視(昭和 13 年 9 月 1 日採用)

K 日本工學會及び其他

- 1) 第 4 回工學大會委員選出
齋藤 彌平 志村 繁隆
- 2) 日本工學會編輯委員會委員薦出
石田 二郎
- 3) 日本動力協會參與員薦出
齋藤 大吉

5. 寄附金に関する事項

本會定款第 6 章第 37 條に依り次の金圓を領収す

領收年月日	寄附者	金額	備考
昭和13年5月25日	日本鋼管株式會社	300,000.00	本會内規 日本鋼管株式會社寄贈資金取扱規則参照
昭和13年7月1日	日本特殊鋼株式會社	50,000.00	本會内規 日本特殊鋼株式會社寄贈資金取扱規則参照

6. 講演大會

- 第 19 回講演大會 昭和 13 年 4 月於東京市
講演數 26
出席者 約 400
- 第 24 回講演大會 昭和 13 年 10 月於大阪市
講演數 36
出席者 約 600

臨時講演會

昭和 13 年 3 月 16 日
歐米視察談
鐵道省大臣官房研究所技師 工學博士 池田 正二君
北支視察談
理化學研究所員 工學士 黒田 正夫君

昭和 13 年 9 月 30 日
歐米に於ける平爐製鋼の管見
住友金屬工業株式會社鋼管製造所研究部長
工學博士 絹川武良司君

支那事變に於ける日本刀の威力(實感)

工學博士 蒔田 宗次君

昭和 13 年 11 月 29 日

鐵鋼配給統制に就て

商工省臨時物資調整局第一課長 工學士 足立 泰雄君

最近北支視察談

日本鋼管株式會社常務取締役 工學士 松下 長久君

昭和 13 年 12 月 16 日

物資動員計畫と生産擴充計畫

内閣企畫院産業部長 法學士 植村甲午郎君

特殊鋼製造の綜合的研究

日本學術振興會第 19 小委員會委員長

工學博士 俵 國一君

昭和 14 年 1 月 24 日

珪石煉瓦に就て

本會評議員 工學士 黒田 泰造君

本邦製鐵事業と大冶鐵山

商工省鑛山局長 法學士 小金 義照君

昭和 14 年 2 月 28 日

鐵鋼の生産配給

商工省物資調整局專門委員 日本鋼材聯合會專務委員

法學士 小川彌太郎君

歐米視察談(特に熔鑄爐酸性操業に就て)

明治專門學校教授 工學博士 嘉村 平八君

7. 調査事項

- 1) 第 16 回研究部會 昭和 13 年 4 月於東京
主 題 平爐の熱勘定
- 2) 第 17 回研究部會 昭和 13 年 10 月於大阪
主 題 熔鑄爐の熱勘定
- 3) 自動車用鐵鋼材研究會(日本機械學會聯合)昭和 14 年 2 月 22 日於東京

8. 表彰 (昭和 13 年 4 月 3 日第 23 回通常總會に於て贈呈)

A 第 8 回服部賞牌及賞金贈呈

- 賞牌受領者
日本製鐵株式會社八幡製鐵所技師 工學士 松原武三郎君
- 賞金受領者
日本製鐵株式會社輪西製鐵所長 工學士 横田 文吉君
日本製鐵株式會社輪西製鐵所作業部長
理學士 川口 正名君
日本鋼管株式會社電氣製鐵所技師
工學士 笹部 誠君
日本鋼管株式會社 工學士 菊池 浩介君
南滿洲鐵道株式會社臨時製鐵試驗工場建設事務所
日下 和治君
陸軍造兵廠大阪工廠鐵材製造所 西村彌三郎君
陸軍造兵廠大阪工廠陸軍技師 藪内周三郎君
日本製鐵株式會社兼二浦製鐵所技師 田畑 農夫君
日本製鋼所室蘭製作所技師 小林佐三郎君

B 第 6 回香村賞牌贈呈

日本製鐵株式會社八幡製鐵所研究所技師
理學博士 田所 芳秋君

C 第 4 回俵賞金贈呈

- 學術上優秀論文 海軍技術研究所理學研究部
海軍造兵少佐 工學士 俵 信次君
- 技術上優秀論文 神戸製鋼所製鋼部長
工學士 久芳 道雄君

9. 圖書

寄贈圖書受付總數 350 部
野田文庫購入圖書 313 冊

昭和十三年度會計報告

貸借對照表

第(1)號

(昭和十四年二月末日)

勘定科目 (資産)	内 譯	合 計	勘定科目 (負債)	内 譯	合 計
(什器)		1,917.06	(未收會費見返)		887.00
(電話)		800.00			
(圖書)		1,116.00	小 計		887.00
(敷金)		855.00	(資 金)		642,514.69
(保證金代用有價證券)		1,044.84	前年度繰返高	276,288.74	
會誌發行保證金	907.00		本年度增加額	366,225.95	
約束郵便保證金	137.84		別口資金 ¥362,129.19		
(分讓印刷物)		250.00	事業資金 4,096.76		
以上六口固定資産計	¥ 5,982.90	14,819.50	昭和十四年二月末資金内		
(有價證券)		51,232.91	服部博士記念資金	20,814.87	
(信託預金)		7,679.89	香村博士寄贈資金	24,935.93	
(銀行預金)			俵博士記念資金	5,170.15	
定期預金	2,473.68		河村博士寄贈資金	5,754.11	
特別當座預金	5,203.21		鐵鋼資料編纂資金	14,643.98	
(振替貯金(口座基金ヲ含ム))		13,009.58	野田文庫資金	124,399.54	
(現金)		301.85	日本鋼管會社寄贈資金	302,980.05	
以上五口流動資産計	¥ 87,040.73	3,045.50	日本特殊鋼會社 "	50,792.43	
(別口野田文庫資産什器)		5,637.49	事業資金	549,491.06	
(別口野田文庫資産圖書)		243,070.00		93,023.63	
(別口資金見返有價證券)				642,514.69	
服部博士記念資金	20,000.00				
香村博士寄贈資金	20,000.00				
俵博士記念資金	5,000.00				
日本鋼管會社寄贈資金	198,070.00				
(別口資金見返信託金)		255,754.11			
河村博士寄贈資金	5,754.11				
野田文庫資金	100,000.00				
日本鋼管會社寄贈資金	100,000.00				
日本特殊鋼會社 "	50,000.00				
(別口資金見返銀行預金)		41,361.33			
服部博士記念資金	794.72				
香村博士寄贈資金	4,892.91				
俵博士記念資金	167.16				
鐵鋼資料編纂資金	14,643.98				
野田文庫資金	15,160.08				
日本鋼管會社寄贈資金	4,910.05				
日本特殊鋼會社 "	792.43				
(別口野田文庫見返振替貯金(口座基金を含む))		556.74			
(別口資金見返現金)		66.16			
服部博士記念資金	20.15				
香村博士寄贈資金	43.02				
俵博士記念資金	2.99				
以上七口別口資金見返資金計	¥ 549,491.06	887.00			
(未收會費)					
		643,401.69			643,401.69

昭 和 十 三 年 度 收 支 決 算

第 (2) 號

(自昭和十三年三月一日 至昭和十四年二月末日)

支 出	内 譯	合 計	收 入	内 譯	合 計
(會 誌 印 刷 費)		22,174.30	(維 持 會 員 會 費)		14,600.00
(版 類 製 作 費)		1,008.03	(贊 助 會 員 會 費)		900.00
(別 刷 印 刷 費)		1,387.70	(正 會 員 會 費)		11,096.90
(原 稿 料)		1,228.44	(准 會 員 會 費)		11,901.25
(約 束 郵 便 料)		1,097.90	(入 會 費)		836.00
(俸 給 及 手 當)		9,799.50	(印 刷 物 分 讓 料)		2,870.74
(借 室 料)		3,705.00	(廣 告 料)		11,581.10
(會 合 費)		887.85	(公 社 債 利 子)		735.48
(日 本 工 學 會 費)		200.00	(振 替 貯 金 利 子)		228.88
(事 務 費)		6,295.00	(銀 行 預 金 利 子)		174.86
(借 室 料 敷 金 追 納)		105.00	(信 託 預 金 收 益)		1,859.29
(圖 書 費)		230.59	(鐵 鋼 試 料 分 讓 料)		10,612.26
(什 器 費)		87.56	(雜 收 入)		31.60
(大 會 費)		5,614.84	(大 會 收 入)		2,970.80
(鐵 鋼 試 料 買 入 代 費)		8,291.40			
(鐵 鋼 要 覽 編 纂 費)		4,000.00	小 計		70,394.16
(豫 備 費)		294.12			
小 計		66,377.27			
(差 引 本 年 度 收 入 超 過 金)		4,019.89			
		70,394.16			70,394.16
			本 年 度 資 金 增 加 額 照 合 表		
			收 入 增 加 額		4,016.89
			上 記 の 通 り		
			(追 加) 支 出 中 資 産 還 元 額		79.87
			什 器 廢 棄	(-) 343.28	
			借 室 料 敷 金 追 納	(+) 105.00	
			圖 書 費	(+) 230.59	
			什 器 費	(+) 87.56	
			差 引 增 額	(+) 79.87	
			合 計 本 年 度 資 金 增 額		4,096.76

別口資金收支決算表

第(3)號

(自昭和十三年三月一日至昭和十四年二月末日)

口 別	支 出	金 額	收 入	金 額	備 考	
(1) 鐵編 鋼纂 資資 料金	(通 信 費)	9'00	(經常費より受入高)	4,000'00		
	(雜 給 費)	472'40	(銀行預金利息)	251'91		
	(印 刷 費)	100'30	小 計	4,251'91		
	(會 合 費)	38'50	前年度より繰越金	11,100'32		
	(雜 費)	88'05				
	小 計	708'25				
	差引次年度へ繰越高	14,643'98				
		15,352'23		15,352'23		
(2) 服部 博士 記念 資金	(賞 金)	900'00	(公債利息)	1,000'00		
	(賞 牌 製 作 費)	278'29	(銀行預金利息)	10'68		
	(受 賞 者 招 待 費)	30'00	小 計	1,010'68		
	(筆 耕 料)	27'20	前年度より繰越金	1,116'86		
	(通 信 費)	11'28				
	(印 刷 費)	39'32				
	(信 託 手 數 費)	10'00				
	(雜 費)	16'58				
	小 計	1,312'67				
	差引次年度へ繰越高	814'87				
		2,127'54		2,127'54		
(3) 香寄 村贈 博資 士金	(賞 牌 製 作 費)	272'20	(公債利息)	1,000'00		
	(通 信 費)	7'30	(銀行預金利息)	78'19		
	(受 賞 者 招 待 費)	3'00	小 計	1,078'19		
	(印 刷 費)	6'99	前年度より繰越金	4,155'01		
	(證 券 保 護 預 手 數 料 費)	3'20				
	(雜 費)	4'58				
	小 計	297'27				
	差引次年度へ繰越高	4,935'93				
		5,233'20		5,233'20		
(4) 依記 念 博資 士金	(賞 金)	200'00	(債券利息)	215'00		
	(筆 耕 料)	4'00	(銀行預金利息)	1'60		
	(印 刷 費)	1'70	小 計	216'60		
	(受 賞 者 招 待 費)	6'00	前年度より繰越金	167'45		
	(雜 費)	2'20				
	小 計	213'90				
	差引次年度へ繰越高	170'15				
		384'05		384'05		
(5) 河博寄 村土贈 金	次年度へ繰越高	754'11	(信託收益)	212'56		
			前年度より繰越金	541'55		
		754'11		754'11		
(6) 野 田 文 庫 資 金	(設 備 改 造 費)	114'11	(信託收益)	3,800'00	支出中財産に還元額 ¥ 8,146'99 内 課 圖 書 ¥ 5,637'49 什 器 ¥ 2,509'50	
	(通 信 費)	2'42	(定期預金利息)	406'95		
	(圖 書 費)	5,637'49	(銀行預金利息)	78'50		
	(什 器 費)	2,509'50	(振替貯金利息)	32'99		
	(印 刷 費)	1'80	小 計	4,318'44		
	(筆 耕 料)	13'30	前年度より繰越金	19,744'68		
	(雜 費)	67'40				
	(振 替 手 數 料 費)	55				
		小 計	8,346'57			
		差引次年度へ繰越金	15,716'55			
		24,063'12		24,063'12		
(7) 日社 本寄 鋼贈 管資 會金	(公債購入費)	98,050'00	(寄贈金)	300,000'00	支出中公社債購入費及信 託金は基本財産に還元	
	(社債購入費)	100,020'00	(公債利息)	1,750'00		
	(信託金)	100,000'00	(社債利息)	2,100'00		
	(購入公社債經過利息)	914'82	(信託收益)	1,754'63		
	(會 合 費)	57'55	(銀行預金利息)	332'78		
	(印 刷 費)	1,409'07				
	(通 信 費)	256'72				
	(研 究 會 費)	319'20				
		小 計	301,027'36			
		差引次年度へ繰越高	4,910'05			
		305,937'41		305,937'41		
(8) 日鋼贈 本會資 特社金 殊寄	(信託金)	50,000'00	(寄贈金)	5,000'00	支出の信託金は財産に還 元	
	(通 信 費)	2'80	(信託收益)	796'43		
	(印 刷 費)	1'20				
		小 計	50,004'00			
	差引次年度へ繰越高	792'43				
		50,796'43		50,796'43		

財 産 目 録

第(4)號

(昭和十四年二月末日現在)

摘 要	昭和十三年二月 末 日 現 在	昭和十四年二月 末 日 現 在	差 引 増 (+) 減 (-)	備 考
資 産 の 部				
(什 器)	2,172.78	1,917.06	(-) 255.72	
(電 話)	800.00	800.00		
(圖 書)	885.41	1,116.00	(+) 230.59	
(敷 金)	750.00	855.00	(+) 105.00	
(保 證 金 代 用 有 價 證 券)	1,044.84	1,044.84		
甲號五分利 壹千圓會誌發行保證金	907.00	907.00		
公債額面				
み號 " 壹百五十圓約束郵便 "	137.84	137.84		
(分 讓 印 刷 物)	250.00	250.00		
(有 價 證 券)	14,819.50	14,819.50		
東京電燈社債額面壹千圓	1,000.00	1,000.00		
東洋拓殖債券 " 壹萬參千圓	12,870.00	12,870.00		
帝國五分利公債 " 壹千圓	949.50	949.50		
(信 託 預 金)	49,373.62	51,232.91	(+) 1,859.29	
三菱信託株式會社	27,428.92	28,481.08	(+) 1,052.16	
三井信託株式會社	21,944.70	22,751.83	(+) 807.13	
(銀 行 預 金)	7,096.56	7,676.89	(+) 580.33	
住友銀行東京支店定期預金	2,393.85	2,473.68	(+) 79.83	
三菱銀行特別當座預金	4,702.71	5,203.21	(+) 500.40	
(振替貯金(口座基金を含む))	11,500.69	13,009.58	(+) 1,508.89	
(現 金)	233.47	301.85	(+) 68.38	
(未 收 會 費)	803.40	887.00	(+) 83.60	
合 計	89,730.27	93,910.63	(+) 4,180.36	
(別口見返資金)(別口財産目録通)	187,361.87	549,491.06	(+) 362,129.19	
合 計	277,092.14	643,401.69	(+) 366,309.55	
負 債 の 部				
(未 收 會 費)	803.40	887.00	(+) 83.60	
合 計	803.40	887.00	(+) 83.60	
差 引 資 金 現 在 高	276,288.74	642,514.69	(+) 366,225.95	

別口財産目録

第(5)號

(昭和十四年二月末日現在)

摘要	昭和十三年 二月末日現在	昭和十四年 二月末日現在	差引 増(+)-減(-)	備考
1. 鐵鋼資料編纂資金	11,100.32	14,643.98	(+) 3,543.66	
三菱銀行特別當座預金	11,084.10	14,643.98	(+) 3,559.88	
現金	16.22	0	(-) 16.22	
2. 服部博士記念資金	21,116.86	20,814.87	(-) 301.99	
帝國五分利公債額面二萬圓	20,000.00	20,000.00	0	
三菱銀行特別當座預金	1,116.86	794.72	(-) 322.14	
現金	0	20.15	(+) 20.15	
3. 香村博士寄贈資金	24,155.01	24,935.93	(+) 780.92	
帝國五分利公債額面二萬圓	20,000.00	20,000.00	0	
三菱銀行特別當座預金	4,155.01	4,892.91	(+) 737.90	
現金	0	43.02	(+) 43.02	
4. 俵博士記念資金	5,167.45	5,170.15	(+) 2.70	
東洋拓殖債券額面五千圓	5,000.00	5,000.00	0	
三菱銀行特別當座預金	165.50	167.16	(+) 1.66	
現金	1.95	2.99	(+) 1.04	
5. 河村博士寄贈資金	5,541.55	5,754.11	(+) 212.56	
三菱信託株式會社信託金	5,541.55	5,754.11	(+) 212.56	
6. 野田文庫資金	120,280.68	124,399.54	(+) 4,118.86	
三菱信託株式會社信託金	35,000.00	35,000.00	0	
三井 " "	35,000.00	35,000.00	0	
住友 " "	30,000.00	30,000.00	0	
三菱銀行定期預金	4,066.72	4,202.37	(+) 135.65	
三井銀行丸ノ内第二支店 "	4,066.72	4,202.37	(+) 135.65	
住友銀行東京支店 "	4,066.72	4,202.37	(+) 135.65	
三菱銀行特別當座預金	1,972.31	879.59	(-) 1,092.72	
三井銀行丸ノ内第二支店 "	2,174.63	983.53	(-) 1,191.10	
住友銀行東京支店 "	1,863.83	689.85	(-) 1,173.98	
現金	38.13	0	(-) 38.13	
振替貯金(口座基金を含む)	1,495.62	556.47	(-) 939.15	
圖書	0	5,637.49	(+) 5,637.49	
什器	536.00	3,045.50	(+) 2,509.50	
7. 日本鋼管會社寄贈資金		300,980.05	(+) 302,984.95	
三井信託株式會社信託金		100,000.00	(+) 100,000.00	
三分半わ號公債額面金十萬圓		98,050.00	(+) 98,050.00	
政府保證興業債券 " 金十萬圓		100,020.00	(+) 100,020.00	
三菱銀行特別當座預金		1,035.42	(+) 1,035.42	
三井 " "		1,764.63	(+) 1,764.63	
住友 " "		2,110.00	(+) 2,110.00	
8. 日本特殊鋼會社寄贈資金		50,792.43	(+) 50,792.43	
住友信託株式會社信託金(甲)		20,000.00	(+) 20,000.00	
同 (乙)		30,000.00	(+) 30,000.00	
住友銀行東京支店特別當座預金 丙)		314.57	(+) 314.57	
同 (丁)		477.86	(+) 477.86	
合 計	187,361.87	549,491.06	(+) 362,129.19	

評 議 員 選 舉

當選評議員氏名

磯村豊太郎君	石川登喜治君	井上匡四郎君	井上 順三君
井上長太夫君	井村 竹市君	西村小次郎君	二階堂行健君
本多光太郎君	戸村 理順君	大河内正敏君	渡邊 義介君
桂 弁 三君	景 山 齊君	金子 恭輔君	吉田 豊彦君

室井嘉治馬君	鶴瀨 新五君	山根 新次君	松田貞治郎君
松本健次郎君	的場 幸雄君	藤 井 寛君	藤田 俊三君
鮎川 義介君	澤 村 宏君	白石元治郎君	島岡亮太郎君
島 安次郎君	末 兼 要君		

表 彰

第9回 服部賞牌受領者	藤 村 哲 之君
服部賞金受領者	石 原 福 太 郎君
同	萩 原 巖君
同	川 野 貴 一君
同	高 島 德 三 郎君
同	長 井 盛君

服部賞金受領者	森 寺 一 雄君
第7回 香村賞牌受領者	海 野 三 朗君
第5回 俵賞金受領者	内 川 悟君
同	多 賀 谷 正 義君
第1回 渡邊賞牌受領者	村 上 武 次 郎君
渡邊賞金受領者	佐々木吉備三郎君

表 彰 者 推 薦 理 由 書

服部賞牌受領者

日本製鐵株式會社釜石製鐵所 技師 藤村 哲之君

君は大正6年京都帝國大學工科大学探鑛冶金科を卒業して九州製鋼株式會社を経て大正14年釜石鑛山株式會社に入社し製鋼作業に従事して日本製鐵株式會社の設立と共に會社に採用せられ爾來釜石製鐵所に於て専ら製鋼作業を担当して今日に至る。其の間十有餘年一意製鋼作業の改善能率の増進に努め其の成果に關しては日本鐵鋼協會第15回講演大會に於て「釜石製鐵所に於ける平爐の構造及び操業に就て」と題しコークスガス及コールドールを使用する平爐の装置及作業に就て詳細なる發表をなし斯界に貢獻する所大なるものあり。殊に本作業上最も困難とする爐壁築造の改善に盡瘁し輸入マグネサイト煉瓦に代ふるにマグネシア・クリンカーをニガリ水にて練合せ、成形して乾燥したる生煉瓦を使用し種々苦心の結果遂に之に成功し爐壁の壽命を著しく長くし平爐の能率を増進し且煉瓦費を低下せしめたるは製鋼作業上特に顯著なる功績なり。仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第7條に依り服部賞牌を受くる資格あるものと認む。

服部賞金受領者

日本鋼管株式會社製鋼班平爐職長 石原福太郎君

君は明治41年八幡製鐵所へ入所平爐職となり、大正2年同所退職同年日本鋼管株式會社創立に際して平爐職伍長として入社、創業勿々諸事不完全なるに拘らず技術的經驗を有せざる従業員を指導して作業に當り鋼塊の増産鋼質の向上に努めたる功により大正7年組長に昇進、大正11年日本最初の重油平爐新設さるゝや發生爐ガスに比してその操作簡單にして平爐作業に多大の利點あるに着目し重油加熱の溫度、バーナーの改良、重油及壓搾空氣の壓力等につき其の蘊蓄を傾倒し今日の成果を挙げ得たり。昭和11年同社に熔鑛爐創設さるゝに及び同社最初の銑鋼一貫作業に少なからざる苦心を拂ひ續いて平爐燃料にコールドール、混合ガスの採用せらるゝに及び其の使用に寢食を忘れて研究したる結果日支事變勃發し重油、石炭等の供給圓滑を缺くに至りても同社は何等の支障なく生産増加に邁進し得たり。君は平素部下の指導統禦に長じ安全運動、防損運動にも熱心にしてよく衆望を聚む、昭和13年6月轉爐工場の作業開始さ

れ爾來僅半歳を経たるのみにて早くも所期以上の優秀なる成績を挙げ得たるは君の部下指導訓育の好妙なるを證して餘りありと謂ふべく昭和13年職長に任ぜられて今日に及び製鋼技術上の進歩發達に貢獻せる所尠ならず。仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第8條に依り服部賞金を受くる資格あるものと認む。

服部賞金受領者

株式會社日本製鋼所室蘭製作所技師 萩原 巖君

君は昭和3年3月北海道帝國大學工學部機械科を卒業後直ちに日本製鋼所に入社室蘭製作所勤務を命ぜられ同所改良部に於て専ら鋼の機械的及物理的の方面の實驗研究に従事し現在に至る。君は獨創力に富み獨得の着眼點に出發して實地作業の改善進歩に盡したる所尠ならず、各種研究の結果にして既に學界に發表したるものには平爐蓄熱室の研究、彈丸に依る鋼板侵蝕に關する研究、焼入鋼の腐蝕割れと焼割に就て、引張試験片に生ずる星形皮面に就て、軟鋼の急冷に依りて生ずる特異なる時効現象、水素が鋼の機械的性質に及ぼす影響等あり、尙防彈鋼板の抗力増進鋼材白點防止に關する有益な基礎的實驗研究を遂げ學術上貢獻する所大なり、仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第8條に依り服部賞金を受くる資格あるものと認む。

服部賞金受領者

東京製鋼株式會社技手 川野 貴一君

君は明治45年2月東京製鋼株式會社深川工場製線部職工見習として入社し、大正4年4月技術師範を命ぜられ、同12年同職長となり次いで技工、技手補を経て昭和7年10月技手に任命せらる。君は最初太線の製作に従事し飛行機用鋼索の製造に成功せしが大正4年後は製線、焼入及び洗場所の兼任となり其の職長として能く此等作業方法を統一的に向上進歩せしめたり。歐洲大戰に際しては當時不可能とせられたる細物13番線の製作に成功し露國よりの大量注文に應ずるを得たり。大正7年ダイス孔作りに使用するポンチの機械的研磨方法を案出して實用新案を得てポンチ孔の形狀の整理統一を計り作業能率を増進すること頗る大なるを以て會社より表彰の恩典に浴したり。大正12年大震災災後工場を川崎市に新設せらるゝや其の一切の設備建設に従事し能く上司を輔けて其の任を全ふ

したり。鋼線口引出装置の改善を圖りて專賣特許を得。又鋼線酸洗後の銹付を廢せんが爲め種々苦心の結果、一種のアルカリ石鹼の製造に成功し光澤ある鋼の素地を作ることを得て、30番以上の細線に於ても能く10匁位の重量のもの規定公差範囲に留むることを得たり。此の特殊石鹼を使用したる結果、梅雨時季に於ける銹を防ぐを得たるのみならず引き延し作業を容易になしたる爲めダイス鋼の節約を爲し従業工員の數を減少したり。次で光線の製作試験に従事し化學的に光澤を生ずる液體の製造に成功し外國品に比し遜色なきものを得るに至れり。從來鋼線の引き延と作業の回數は僅かに連續8回に留り其の抗張力の如き一平方耗200匁に留りしも現時にありては15回乃至16回或は特殊の際には20回以上も連續引き延しを爲し得るに至り眞に製線技術上の一大革新を見たるものにして此の抗張力も亦最近著しく増大するに至れる等同君の前後27年に亘れる多年の努力は正に世に誇るべき新記録を出せるものにして鋼線製造上貢獻する所甚大なり。仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第8條に依り服部賞金を受くる資格あるものと認む。

服部賞金受領者

日本鋼管株式會社技術研究部技手 高島徳三郎君

君は大正11年3月茨城縣立工業學校卒業、同12年陸軍科學研究所に入り昭和10年8月日本鋼管株式會社研究所に轉ず。この間終始鐵鋼及一般金屬材料の顯微鏡寫眞撮影に従事しその方面に於ける獨特の手腕を有し、日本鋼管株式會社に入社後も金屬顯微鏡寫眞撮影を擔當し一意専心業務に努めつゝあり。同君は金屬材料試驗法の研磨及其の寫眞撮影に就ては實に微妙なる技術を有し如何なる難物たる試料も容易にこれを研磨撮影する技能を有し、鐵鋼の調査研究に於て同君の技術的解決に待つもの頗る多し。又スンプ法の現場應用に關してはあらゆる技術的方面に亘り詳細に研究し、同方面に一紀元を劃しその研究は「鐵と鋼」誌第24年第6號に發表されしが今やスンプ法は金屬製品の材料調査に缺くべからざる方法となるに至れり。

以上の如く同君は過去15年間に亘り終始一貫金屬材料の顯微鏡撮影に盡力し、鐵鋼その他金屬材料の調査研究上に寄與せる功績頗る大なり、仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第8條に依り服部賞金を受くる資格あるものと認む。

服部賞金受領者

株式會社日本製鋼所室蘭製作所技師 長井盛君

君は大正3年7月熊本高等工業學校採鍊冶金科卒業後直に日本製鋼所に入社、室蘭製作所勤務を命ぜられ熔鋼工場に於て専ら高級平爐鋼の熔解及造塊に従事し現在に至る、此の間20有5年の長きに亘り實地作業の改善發達に盡したる所尠ならず、曩に歐州大戰の起るや本邦に於ては低磷銹輸入杜絶に遇ひ高級鋼製造上異常の苦難に直面したるも君は會社技師故林密氏を助けて脱磷に關する獨得の方法を完成せしめ此の難局を打開することを得たり。從來同君は製鋼技術の實際家として酸性鋼特に大型鋼塊の製造に終始し研究方面の技術者と常に圓滿密接なる關係を保ち學理的研究を作業に取入れ彼此相授け製品の改善向上につとめ殊に一般製鋼技術上至難とせられたる特殊鋼材の白點防止にきつては常に獻身的の努力をなし研究の結果をよく了解咀嚼し銳意製品の改良につとめ其の成績大に見るべきものありて現在殆んど其の發生を見ざるに至らしめたり。現下各工業共益々良質大型の製品を必要とする時代に於て以上の如く高級平爐鋼製造に關する實地作業の進歩發達せしめたることは斯界に多大の貢獻をなしたるものにして服部博士記念資金取扱規則第8

條に依り服部賞金を受くる資格あるものと認む。

服部賞金受領者

日本製鐵株式會社技師 森寺一雄君

君は大正6年3月熊本高等工業學校採鍊冶金科を卒業し、九州帝國大學助手を経て、大正8年八幡製鐵所に入り研究所勤務となり主として鐵鋼の物理的及化學的諸性質の研究に従事し熱心なる努力を續けて今日に至れり、同君の研究は八幡製鐵所内の報告として既に160餘に上りしのみならず多數の論文を「鐵と鋼」「製鐵研究」其の他の雜誌に發表して鐵鋼學術及技術上の發達に貢獻する所尠ならず、特に鋼塊鑄型の研究並に鋼板の加熱熱りの際に發生する龜裂の研究は最も關係者の注意を喚起せり、仍て同君は服部博士記念資金取扱規則第8條に依り服部賞金を受くる資格あるものと認む。

香村賞牌受領者

日本製鐵株式會社八幡製鐵所研究所技師

理學博士 海野三朗君

君は大正8年八幡製鐵所に入所以來同所研究所熱工學方面的研究に従事せられ發表せる研究論文も其數甚だ多し。殊に我國に於ては從來鐵鋼製産の急に逐はれ之が理論的熱効率の如きは等閑に付せられたる時代に於て夙に熱効率の研究及之が指導に従事せられ其發達を促進したるは、深く識者の認むる所なり、同君は諸金屬の高温に於ける熱恒數並に鐵炭素系合金の高温に於ける比熱及變態熱等を求め更進んで鐵炭素系合金の相の變化に伴ふ熱量の變化に付一定不變の法則の存在する事を知り之を實驗的に證明したるが之等の功績に依り同君は昭和10年帝國學士院賞を授與せられたり。同君は之等基礎的研究を應用して鋼塊の種類及大小の相違によりて生ずる加熱時間の相違、鋼塊を空中に放置せる場合の加熱要の石炭當量、歴延作業に於ける鋼材の加熱及冷却速度、其他熱工學に關するあらゆる研究を行ひ鐵鋼の理論及作業上貢獻する所特に顯著なり、仍て同君は香村博士寄贈資金取扱規則により香村賞牌を受くる資格あるものと認む。

俵賞金受領者審定書

俵賞金受領者

技術上有益なる論文

長尺軌條の歴延に就て(鐵と鋼第24年第9號掲載)

日本製鐵株式會社八幡製鐵所 内川悟君

俵賞金受領者審定書

俵賞金受領者

學術上有益なる論文

鑄鐵の腐蝕現象(鐵と鋼第24年第8號掲載)

大阪帝國大學助教授 工學博士 多賀谷正義君

渡邊賞牌受領者

東北帝國大學教授 金屬材料研究所長

理學博士 村上武次郎君

君は京都帝國大學理科大學化學科を卒業せられ、大正5年東北帝國大學に奉職以來20餘年本多博士及他の共同研究者と共に鐵鋼其他金屬に關する諸研究に従事せらる。其間に於ける主要なる業績は特殊鋼の物理冶金學的研究にして君はニツケル鋼、クロム鋼、モリブデン鋼、珪素鋼、ワナヂウム鋼、ニツケルクロム鋼、高速度鋼等各種の特殊鋼に就て極めて複雑にして研究困難なる多元系の状態圖を種々の物理冶金學的方法に依りて決定し組成、溫度及熱處理による變態點及顯微鏡組織の變化を明かにし特殊鋼の製造加工熱處理等

の實地作業上に最も重要な資料を提供せられたり。以上の諸研究は廣く内外の學術雜誌に發表せられ其數實に 20 餘編に及べり。君は之等功績によりて既に昭和 2 年帝國學士院より東宮御成婚記念賞を授けられたるが爾來絶へず研究並に後進學徒の指導に獻身的努力を續けられ學界並に工業界に貢獻せらるゝ所特に顯著なり、仍て同君は日本特殊鋼株式會社寄贈資金取扱規則第 4 條による渡邊賞牌を受くる資格あるものと認む。

渡邊賞金受領者

日本特殊鋼株式會社技師 佐々木吉備三郎君

君は昭和 2 年 3 月東京帝大冶金學科鐵冶金を卒業直ちに日本特殊鋼合資會社(昭和 13 年 3 月株式會社に変更)へ入社し電弧爐熔解係を擔當し昭和 4 年 5 月ルツボ製造並にルツボ製鋼係に轉じ昭和 5 年 9 月より 11 月まで東北帝大金屬材料研究所に於て各種研究の基礎方針等につき學び同年 12 月獨逸國デュッセルドルフ市カ

イゼルウキルヘルム鐵研究所に入所「冶金部」に於て所長ケルバー教授指導の下に特殊鋼製造に關する研究をなし主として高周波爐の理論並に操業につき修む、昭和 7 年 8 月同研究所を退き歐米各國の鐵鋼方面を見學し 9 月歸朝後日本特殊鋼會社に於てアヂヤックス高周波電氣爐の創業及操業を擔任し爾來同社の高級特殊鋼の生産に當り現今に及び。君は本邦に於て高周波電氣爐製鋼の未だ發達せざる時代に於て其操業に苦心を重ね能く優秀なる特殊鋼を製造し得るに至り以て本邦に其範を示したるものにして特殊鋼製造技術の發達に貢獻せる所大なり仍て同君は日本特殊鋼株式會社寄贈資金取扱規則第 5 條により渡邊賞金を受くる資格あるものと認む。

以上報告候也

昭和 14 年 4 月 2 日

社團法人日本鐵鋼協會々長理事

工學博士 齋藤大吉

議 事 速 記 録

○議長(齋藤會長) 引續きまして議事に入ります、第 1 は昭和 13 年度會務報告を申上げる筈でありますが大體今私が御話致しました前の報告で盡きて居ると思ひますので、皆様に差上げてあります印刷物にずつと載せて置きましたので、別に會務の報告はやりませぬから之を御覽を願ふことに致したいと思ひます。

それから次は昭和 13 年度收支決算報告及同 14 年度收支豫算、之を一つ鹽澤委員に御報告願ひます。

○鹽澤常務委員 會計狀態は御手許に差上げました第 1 號から第 5 號表即ち貸借対照表、收支決算表、別口資金收支決算表、財産目録、別口財産目録の五つの表にあげました通りで御座います、詳しいことは表を御覽戴くことに致しまして、大體の數字だけを申上げます。

昭和 13 年 2 月末日の資金が 276,288 圓 74 錢御座いましたのが昭和 14 年 2 月末日に於きましては 642,514 圓 69 錢となり差引増加額が 366,225 圓 19 錢となつて居ります。此の内譯は事業資金が 4,096 圓 76 錢、別口資金が 362,129 圓 19 錢となつて居ります。前年度に比較しまして事業資金に於きましては大差はありませんが、別口資金が日本鋼管及日本特殊鋼兩會社の寄贈資金に依つて著しく増加して居ります。

尙前申上ました昭和 14 年 2 月末日現在の 642,514 圓 69 錢の内譯は、事業資金が 93,023 圓 63 錢、別口資金が 549,491 圓 06 錢と云ふことになつて居ります。

次に第 2 號表の支出の欄にあります差引本年度収入超過金が 4,016 圓 89 錢であります、之に圖書及び什器等資産に還元します金額が 79 圓 87 錢ありますから、之を加へたものが本年度資金増加額 4,096 圓 76 錢となります。

其次に第 3 號表に於きましては本年度新たに日本鋼管及び日本特殊鋼兩會社の寄贈資金額が載つて居ります。

第 4 號表の財産目録は主として前記兩會社の寄贈資金に依りまして 366,225 圓 95 錢の額を示して居ります。

尙又第 5 號表には是又本年度より 7 番に日本鋼管會社寄贈資金、8 番に日本特殊鋼會社寄贈資金の二項目が設けてあります。

其の外昭和 14 年度經常收支豫算及昭和 14 年度別口資金收支豫算は何れも表にあります通りでございますので、是は説明を略します

大體斯う云ふ様な會計狀態でありまして順調に且著しく膨脹に膨

脹を重ねて居る様な次第でございます。

○議長(齋藤會長) 以上で 13 年度の收支決算報告、14 年度の收支豫算報告を申上げましたのですが、收支決算の監査報告を西村監事に御願致します。

○西村監事 昭和 13 年度貸借対照表、財産目録、收支決算、特別資金の收支決算を監査致しました結果何れも正確なるものと認めます、茲に此の事を御報告申上げます。

○議長(齋藤會長) 只今西村監事から何れも正確なることを御報告になりました、是で決算は皆さんの御承認を得たものと認めて宜しうございませぬか。〔異議なし〕と呼ぶ者あり

○議長(齋藤會長) 御異議ないものと認めます。

次は「=」の任期満了評議員の改選であります、是は豫ねて御投票を願つて居ります、それで是から開票をして戴きたいと思ひます、御厄介でございますが川上さん、石原さんに御願致します。

○石原善雄君 本日投票なさる方がございましたらどうぞ願ひます……おいでにならぬやうでございますから締切ります。〔開票中〕

表 彰 式

○議長(齋藤會長) さうすると開票の結果は後刻御報告致しますとしまして、是から其の次の第二の表彰式に移ります、尙ほ各受賞者諸君の多大なる功績については御手許に差出して置きました推薦及審定理由書に詳記してありますから此席で申述べることを省略致します。

○會長(齋藤會長) 是で表彰式を終りますが、一言ちよつと申上げて置きますのは、此の度差上げました賞牌でございますが、服部、香村、渡邊賞牌、是は金牌で以て差上げる筈ですが、御承知の通りの時局柄金で作る譯に行きませぬので、其の代りの賞牌として銀製に致して居ります、後日金が使用出来るやうになりましたら直ちに金賞牌と御取替をすることになつて居りますから左様御承知置きを願つて置きます。

それでは是から評議員選挙の開票の結果を御報告願ひます。

○石原善雄君 只今から開票の結果を御披露申上げます、豫ねて推薦の評議員候補者が今御名前を申上げますが、全部當選致されました、其の外次点者もございませぬけれども、極く少数でありますか

ら、省きます(當選者氏名前掲の通り)

す。〔拍手起る〕

○議長(齋藤會長) 是で第 24 回の通常總會を終ることに致します

午後零時 30 分閉會

晩餐會卓上演說速記

(昭和 14 年 4 月 2 日(日曜日)午後 7 時帝國鐵道協會々館に於て開催)

○齋藤會長 御挨拶を申し上げます。本日は本多金屬學會長、並に 4 日に工場を拜見させて頂きます各社の幹部の御方々、並に此の度榮譽ある賞牌及賞金を御受領になりました多数の方々、及び今明兩日に互り有益なる御講演を願ひます諸君を御招待申し上げまして懇親會を開きました所御多忙中にも拘りませず御出席を頂きまして、本會と致しまして實に光榮に存ずる次第であります。夫れにも拘りませず御覽の通り極めて粗末な御馳走でありまして、失禮の段は皆様に御詫を申し上げて置きます。

尙閉會の際に申し上げましたやうに、此の度は出席申込の方が 796 人、の多数に上りまして、從來のレコードを破りまして非常な盛會を極めましたことは私共の又非常に喜びとして居る所でございます。又本夕は會員の諸君にも多数此の宴會に御參列下さいまして、大變賑かに懇親會を開くことの出來ますのは私の非常に喜びとする所であります。皆様に深く御禮を申し上げます。

尙最後に私は皆様と共に來賓各位の御健康を祝する爲に杯を挙げたいと思ひます。どうぞ御參同を御願致します。〔乾杯〕

尙先例に依りまして 4~5 の方にテーブルスピーチを御願致したいと思ひます。で、私に指名權を與へて頂きたいと思ひますが、

〔拍手起る〕

先づ本日第一回渡邊賞牌を御受領になりました鐵の物理冶金學的方面を非常に深く御研究をされて、其結果を御發表になりました我々を非常に裨益されました村上博士に何か御話を願ひたいと思ひます。〔拍手起る〕

○村上武次郎君 今般計らず渡邊賞牌第一回の受賞者たるの榮譽を得ましたことは誠に有り難く光榮に存ずる次第でございませぬ。此の御推薦に預りました理由は特殊鋼の物理冶金學的研究に就て多少の仕事をしたと云ふことでありますが、私は唯日本に於きましては割合に古くから其の方の仕事をして居るといふに過ぎないのでございませぬ。私は今から 23 年前の大正 5 年に本多先生が東北大學に於て今日の金屬材料研究所の前身であります所の理化學研究所を御始になりました時に、先生の助手として仙臺に參りまして以來特殊鋼に就て多少の研究をして來た者でございませぬ。其の頃迄は冶金學と申しますと主として鑛石からメタルを採ると云ふ化學的方面の仕事が多かつたのでございませぬ。フィジカルメタラーヂーと云ふ言葉は其頃に英國のローゼ、ハインが附けた名であります。其の頃から段々にフィジカル方面よりメタルを研究することの必要が認められて居りました。所で本多先生が理化學研究所を御始になりましたのは、歐洲大戰の爲に外國から物資が入らないやうになり、日本でそれぞれ研究をして良い物を造らなければならぬと云ふ時でありまして、先生は物理學者でありますから物理學的の立場からして御研究を進められ、色々新しい研究方法を御考案になりまして、盛に御研究になりました結果急に物理冶金學の進歩を見たのであります。磁氣分析、即熱磁氣的性質に依つて鐵鋼の色々な性質を研究すると云ふ方法は先生に依つて始められたのであります。其の他熱天秤であるとか熱膨脹の測定法であるとか、或に電氣抵抗の測定法であるとか、其の他各種の方法を御考案になりまして、我々はそれに依つて仕事

を致しましたので種々の事實を知ることが出來たのでございませぬ。

又其の頃に俵先生が仙臺へ度々御越し下さいまして我々のやつて居ります所の顯微鏡組織の方を親しく御指導下さいましたのであります。今日私が賞牌を戴くことが出來ましたのも兩先生初め其の他共同研究者の御蔭であると有難く御禮を申し上げる次第でございませぬ。

かようにして物理冶金學が段々と進歩して參りました、鐵鋼に就ても此物理冶金學的研究方法が盛に用ひられるやうになり加工熱處理等の上に應用せられて、一層此方面の進歩を見たのでございませぬ。當鐵鋼協會がきまして其の頃から段々とさう云ふ方面の研究、勿論其の他の研究も多く發表されて居りましたが、今日の如き盛んなことは決してないのでございまして、前に講演會に出席する爲には旅費を貰つたものであります。さうして講演會で講演を致しますと、それは是非雑誌に發表せよと云ふやうなことであります。所が其の後旅費が半額になり、それから後にはもう旅費はこちらから出ないからしてこちらの方で旅費を自辨で講演會に出よと云ふやうになりました。それにも拘らず今日の如く研究の發表が非常に澤山になり非常に盛會になりましたことは誠に結構なことと存じます。

物理冶金學はさう云ふやうに段々進歩致して參りましたが、良き金屬及合金を造ることはさう云ふ物理冶金學的研究だけでは充分ではありません、物理冶金學的研究は主に固つてしまつた後の色々な性質を研究するのであります固つてしまつて後の處理加工では或程度の改良しか出來ないのであります、充分良いものを造りますにはどうしても熔融状態に於て良いものを造らねばなりません。即メルチングの方から研究をしなければなりません、さうなつて來ると化學的研究が非常に必要になつて來るのであります、近年其の化學冶金の方面も段々と進歩して參りましたが、まだ今日は物理的方面よりは頗遅れて居るやうであります。それは研究がむづかしいためだけに熔融状態の高い溫度に於ての研究は種々の困難が多いからであります。けれども是は頗る重要なことでどうしてもメルチングの状態からインゴットにする所の研究が非常に必要であります。此の方面の研究に就きましたは俵先生は學術振興會の第 19 小委員會の委員長として非常に、御盡力になりまして、現場に於て此の方面の仕事をして居られる方、又我々のやうに實驗室で研究をやつて居る者等各方面の方々が委員になられまして、今日協同研究が進められつゝあるのでございませぬ。之に依つて我國製鋼技術が、一段の進歩を見るであらうと大變に喜んで居る次第でございませぬ。どうか是よりは今日遅れて居る方面の化學冶金の研究に一層御盡力あらんとを希望する次第でございませぬ。(拍手)

○齋藤會長 次には長年の間八幡製鐵所に於て専ら熱經濟に付て御研究になつて居りまして有益なる論文を御發表になつて居ります又本日は香村賞牌を御受領になりました海野博士に何か御話を願ひます。

○海野三朗君 只今御鄭重な紹介を頂きまして誠に汗顔の至りでございませぬ。御言葉に甘へまして一言御挨拶を申し上げたいと思ひま

す。製鐵作業は熱の方から觀察致しますと、爐の構造が如何に良くても、又作業方法が如何に優れて居りまして、又原料が幾ら揃つて居りまして、茲に燃料即ち熱と云ふものがなかつたならば銑鐵や鋼が作られないのであります。さう致しますと此の熱と云ふものは製鐵作業の根幹をなすもので有つて其關係する所が非常に廣く且つ大きいもので有る事が判るので有ります、即ち今日の重工業の最も大なる部分を占めて居るのでございます。然るに此熱に對しては、動ともすれば等閑視せられた感なきにしも非ずと存するので有ります、爐の構造等は燃料の種類又燃焼模様、溫度の分布等によりて自ら定まるもので有りますから此の熱の方から考究致しまして始めて蓄熱室の構造とか、或は熔鑄爐の形とか、寸法とか、さう云ふものが生れて來るのではないかと思ふのでございます、加熱爐の型は今日用ゐられて居るもので果して善いのか、高爐の高さ熱風爐の大きさ、數等は果して、夫れで良いので有るかどうか、又平爐蓄熱室の構造は今日一般に用ゐられて居る型で宜しいので有るか、果して蓄熱室としての效力を充分に發揮して居るか否や、最善最上のもので有るかどうかと云ふ事に付ては此熱が如何に利用せられて居るかに依りて其優劣の程度が定まるので有ります、して見れば爐の構造も作業の方法も凡てが此熱の利用よりして自然に定まつて來るもので御座います、此熱の働き、熱の作用を研究する事が凡ての根本で有ると信するので御座います、併し乍ら此熱を研究致しましても實際の仕事に即したものでないといけなと存じます、從つて單に數値を算出して見ただけでは充分でない、工業には常に經濟が伴はねばなりませんので此經濟の考を常に織り込んで調査研究をせねばならないのは勿論で有ります、夫故研究は手つ取り早く効果あらしめなくてはならぬのです、即ち私は最少の熱量を以て最大の效果を得ようと云ふ所に直接進みたいと云ふことを念願して居る次第であります。先年大阪で鐵鋼協會の大會がございました時に、此の鋼片の加熱速度に付きまして實驗の結果から色々研究の結果を報告致しました、其の後で今此處に居らつしやいます今泉嘉一郎先生がテーブルスピーチの時に仰つしやいましたのは、今尙私は覺えて居りますが、先生は此頃の研究は實際に近付いて來た感が有つてまことに頼もしい、研究は實際に即したものでなければいけないと云ふ御話でございまして、私は先生の御考は實に最もであると考へまして其の時以來今日迄金科玉條と致して居るので有ります。今日外國の雜誌を種々見ましても、又獨逸の熱管理所の報告等を見ましても誠に熱の方の計算が行届いて微に入り細に互つて居ります。併しながら之を通覽致しますと餘り枝葉末節に拘はりまして、根本の最後の目的を忘れるやうになりはせぬかと云ふ感を起さしめる所なきにしも非ずでございまして、所謂「兎を追ふ者は山を見ず」と云ふ事になりましては本來の目的を忘るゝ事になります。時々さう云ふ感を起さしめらるゝことがございまして、それで私は此の熱は總ての根本でありまして、鋼になるもならぬも、鑛石から銑鐵が出るも出ないもそれは悉く熱の働きでありますから此熱によりて如何にして熔鋼が精鍊せらるゝので有るか、又熱の供給即ち量と溫度とによりては精鍊の速度が如何に變化するもので有るか、又鑛石から熔銑を生ずるに當りては此熱量と溫度とが如何に影響するもので有るかと云ふ根本の問題を追求し而して最後の目的としては最少の燃料を以て最大の效果を擧げると云ふことで葛地に進みたいと念願して居る次第でございまして。

實は私は大學に入りまして一年のとき成績劣等でございまして落第を致しました。本多先生に御指導を頂きましたのでございますが、

實は先生の御研究の御態度を私が考察しますと、先生は百折屈せず、千挫撓まずと云ふことで一貫して居られたのでございます。私は如何に鈍物なりと雖も其の考を持つて葛地に前進すれば何かの効果が現はれると云ふことを考へまして、先生の實際の生きた教訓を金科玉條として、参りました所、計らずも今回此榮譽ある賞を戴いたので御座います。唯々思ひますに本多先生を始め先輩諸彦の御指導の賜に外ならない事を感じます、此御恩を如何にして報じませうか、不肖如何に鈍なりと雖も諸先生の御指導を便りに致しまして今後も葛地に其の方向に進みたいと思ふのでございます。併しながら實際の作業に従事して居なさる方々の御意見を伺ひ得ませぬければ研究はどうしても机上の空論に陥り易いのでございます。就きましてはどうか實際の作業に従事して居なさる方々の御指導御援助を仰がなければならぬと存じて居る次第でございまして。どうぞ今後とも宜しく御指導、御援助の程を御願致しまして御挨拶に代へたいと思ひます〔拍手〕

○齋藤會長 次は矢張り本日服部賞牌を御受になりました藤村君に何か御感想なり、御話を承りたいと思ひますが、藤村君は釜石製鐵所に御赴任以來、從來其處にありましたスカレドフのシャロー・バスの平爐、それの改良に御盡力になりまして、目下は非常に能率の良い平爐で、而も其の爐のキャパシティーを非常に増大されて居ると云ふやうに承つて居ります。又燃料に付きまして早くよりコークスガス及コールタールなどを平爐の燃料として御使用になることに御成功になり尙數年前よりは特殊のマグネシア・ブリック、燒かないで御使になると云ふやうな大型のマグネシア・ブリックを御造りになることに御成功になつて居るといふやうに承つて居ります。何かそれ等の點に付て御話願つたら結構と思ひます。(拍手)

○藤村哲之君 只今會長さんから大體御紹介を頂いたのでありますが釜石でコークスガスとコールタール併用すると言ふことは此處においてなる俵博士が當時の社長牧田博士に御紹介になつて間もなくミスター、スカレドフをして特殊な設計をさせられたのに始まつたのであります。それに就きましては當時の西村所長及皆さんが非常な御盡力でございまして、私共は唯犬馬の勞を取つたに過ぎないのであります。當初はミスター、スカレドフと私共は盲滅法にやつたのであります。色々豫備試験もやつて漸く爐の中に吹込むて行きましたが、發生爐ガスのやうに燃えないものですからどうなることかと非常に心配したのです。所がミスター、スカレドフとカロリーから勘定しまして大丈夫熱が上がると言ふことで作業を續けて居りました。所が心配したことはないで、熱はどんどん上つて來まして、寧ろ上り過ぎたのであります。一番最初の裝入當時はマグネシアスタンプも充分燒付けらるる位に熱が上つたので第一回目のチャージの時は西村所長が御立會になりまして、多少の支障があつたが5時間ちよと餘りで出たのでやつた人もそんなに早く出るとは思つて居らず實は案外であつたのであります。然しこれは先程來御話のあつたやうに我々に熱量の觀念が薄かつたためでもつと細かく科學的に考へなければならぬと言ふことを其の時に感じた譯で、それ以來メーターを附けまして出来るだけ現場に則した測定をやりまして、漸次操業方法を變へライトチャージからヘヴィーチャージとし、又バーナーの方も色々改良致しまして、今日のやうな結果になつたのであります。是は全く先輩の方々及び俵博士の御鞭撻の結果であると感謝して居る次第でございまして。斯の如き革新的な改良計畫が進められて發生爐が忽ちにして廢止になりまして、一塊の石炭をも使はぬ様になり、今は發生爐の所にはコムプレッサーが据つて居る有

様で、當時おいでになつた方々が見て感慨無量のものがある位面目を一新しました。今後の擴張工事にもそれと似寄つた爐を造ることになりまして今築造中であります。此等にも吾々の浅い經驗を取入れまして更に一つ努力して見たいと考へて居ります。尙此の際に方面を變へて本會の先輩の方々に訴へ度い事は今日のやうに各方面に擴充が計畫されて居りますが、それに就いて夫々物的資源を早く各方面に配給して欲しいと言ふ事であります。他方人的資源は我々が戦地に行つて居る勇士の代りになり 3 人前も 4 人前も働けば稍々満足出来る譯でありまして、此は國民皆覺悟して居る所でありまして、此に反し擴充に對する物的資源の確保配給は左様容易且つ簡單には参りません。之に對しては我々素人から見ましても資本が一時に使はれて、どうも實際の資源と平衡が取れて居ない様な感じがするので、此の邊は先輩の方々の御賢察に依つて此の資本が最もエフィシエンシー好く、又早く此の擴充が確定した資源で以て全能力を擧げて行かれる様に格段の御配慮を願へば我々現場員は非常な力を持つて仕事をする事が出来るぢやないかと考へて居る次第であります。甚だ詰らぬことを申し上げましたが是で責を塞ぎたいと思ひます。(拍手)

○齋藤會長 只今色々御話を承りますれば東北大學の金屬材料研究所創立の際には金屬顯微鏡の方は俵博士が御指導になりまして、其つ内から村上博士の如き榮譽ある受賞者を出し、又釜石製鐵所でコールタール及コークスガスを併用すると云ふことも矢張り俵博士の思ひ付に依つて其の仕事が今日の成功を見るに至つたと云ふことであります。之を聽かれて俵博士も大いに感慨無量の所もあらうし、又大いに得意の所もあらうと思ふ、昨日來研究部會に於ても色々御高説を承つて、私は俵博士は鐵鋼界の、殊に研究の方面に於ての大久保彦左衛門で各方面へ向つて遠慮なく言うて貰つて、而もそれが人に悪感情を起させないのであります。それで將來も盛んにやつて頂きたいと云ふので、大久保彦左衛門と云ふニックネームを昨日から實は與へたのであります。(拍手)

今夕は大久保彦左衛門的に何か御話を願ひたいと思ひます。

【拍手起る】

○俵 國一君 ちよつと御挨拶申し上げます。村上博士がさつき私のことを出されて誠に實は恐縮して居るのです。又今會長の言はれたことは違ふのです。鐵鋼材の顯微鏡組織のことにつき 20 幾年前になります。仙臺の本多博士の所へ年に 3 回行つて居りました。其の間村上さんが専ら特殊鋼の研究に従事せられ、其の組織を吟味せらるゝ際、今でも時々懐ひ出しますが寫眞に撮らないで、幾百枚の組織を上手にスケッチをされたのを一々拜見しました。もう其の熱心なる努力に敬服して居りました。説明されるに條理整然意見を加へることのないものでした。今日の御榮譽を受けらるべき第一人者と存じ祝福致します。それに私の名前が出まして實は甚だ恐縮して居るやうな次第であります。それから藤村さんの言はれたのも之も大變見當が違つて居ります。スカレドフが私の所に來まして何とか勤め口はなからうかと云ふので何でも初に三池の石炭の硫黄を取る特許を持つて居ると云ふことを言われて居つたのです。夫れならばと牧田さんに紹介したと云ふだけで、釜石の平爐には以前からでございまして、皆が注目致しまして、鹽基性平爐に付ては釜石の藤村さんの所と云ふやうに、少くとも私の知つて居る範圍ではさう云ふことを申して居つたのであります。今日の御榮譽は當然過ぎる程と思ひます。それだけの話でありまして、今名前を言はれて誠に恐縮致します。

先程村上博士が言はれた通り、誠に私は喜ばしいことは實際本多さんのやうな人が居られて鐵鋼に關する物理の方は稀に見る進歩をして誠に喜ばしいことでありますが、如何せん化學の方……即ち製鐵鋼の際の化學反應等に關しては微力……誠に悪うございましてどうも其の方面の研究者の腕が微力でせうし、研究することが頗る困難な爲めでせう餘り進歩しないのです。それで私は言ひにくひのですが、村上博士は京都大學で化學を學ばれた方です、仙臺で化學の内の物理冶金の方面に行かれた。夫も大切ですが將來は化學専門否冶金家でも良い之から化學冶金、之も變な名ですけど冶金の内の化學反應を取扱ふ方面に向つて貰ひ度い。昨年北大の柴田教授の下で化學を學んだ多數の人が製鐵所に就職された夫にも注意した程です。さうでなければどうしても製鐵鋼法に關する技術は科學的に進まない。是が私が日本學術振興會で研究をさせて貰つて皆様の御世話をして居る所以であります。それを村上さんのやうな學者から多少とも認めて貰ふた……最も村上さんには委員として何時も努力して貰つて居ります……誠に自分として喜ばしいことで本當に感謝をして居る譯であります。併し昨日の研究部會でも色々お話がありましたが、之からは私の念願とする製鐵鋼に關する化學の方も段々進歩させよう、併し幾多の困難が前途に横たわりませう。今日も柴田博士、的場博士もおいでになります、色々さう云ふ技術のことは進歩させられて居る。けれども物理の方は新しき性質のものを造る。之は派手です而して現場の方に受け易いと思ふのであります。化學の方は下積に成る覺悟が必要で、又現場に於て他の條件が多いので能く利用して呉れませぬもので、現場と研究所との連絡が悪いと云ふことを豫ねて思つて居ります。學術振興會の方では現場の方と學者の方が能く話合ふ誠に圓滑に行われて居る。それで昨日の研究部會でも某會社の研究所の方と現場の方がお互に聽き合せて居られるので、是は甚だ怪しからぬと云ふことを申して誠に相濟ませぬでした。昨日は夜の會でありましたが、今泉博士は御自分の御談を取消されました。私は話す機会がなかつた、或はあつたかも知れぬが氣が附かなかつたので、今日改めて誠に相濟まぬことを申したと云ふことを御詫致します。其の後一人の方が私に研究所と工場との圓滑な聯絡に就て重役の方に傳へて呉れと云ふのです。それは斯う云ふのです、研究をやつた結果は總て現場に行くべき筈だ、是は冶金の仕事もさうなくてはならぬ。夫れには中間的にやる半ば工業的に進んで研究する必要がある。それは皆様も御存じの通り東京電氣の研究所や米國の研究所がさうなつて居ります。化學の方に付ては殊に今の中間的の研究所と現場との間の研究がなくてはならぬのです。會長から彦左衛門の眞似をしてやつて見ると云ふことでありますが、私共が申しましても聽いて貰えないかも知れぬ、聽く聽かぬは向ふの勝手です。海野博士の言はれるやうに實地に即した研究が必要ですが、それがなかなかむづかしい、どうしても以上申した様にしないでならぬと思ひます。さう云ふことを各工場の今日お集りの方は御考を願ひたい。老齡ですから自分で研究は出来ませぬ、根氣の續く限り研究者と實地家のチームワークに之に全力を注ぎたいと、此の事が日本の現状で一番立ち遅れて居ると思ひます。誠に今晚色々兩氏の御話に私の名前が出て汗顔の至りであります。學術研究のことに付てつひ昨日お喋りを致しまして、それに付て今夕改めて御詫を致します。(拍手)

○齋藤會長 俵博士は大變に御謙遜であります、どうか今後とも御構なく大に彦左衛門振りを御發揮下さいまして鐵鋼界の爲に御盡し下さらむことを切望して置きます。次は今度大阪に出來ました

關西支部の支部長として御就任下さいました住友の荒木宏さんに、何か關西支部の將來の活動に付ての御抱負なり、其の他がありましたら、何でも宜しうございますからどうか御話を願ひます。

〔拍手起る〕

○荒木宏君 それではちよつと此の機會を利用して御挨拶をさせて頂きます。

今回會長初め理事の方々の御配慮に依りまして大阪に日本鐵鋼協會關西支部と云ふものが出来たのでございます。是はまだほんの出来たばかりでありまして、皆さんにまだ申し上げてない、尤も今日午前中總會に於て會長から御報告がありましたのでありますが、其の節會長は是は日本鐵鋼協會として草分の支部であるからして、充分其點を考へて色々仕事に付て活動をして貰ひたいと云ふ御希望がありました。其の草分の支部に私が支部長たる御推薦を受けたのでありますが、最初の支部長たる私が淺學非才でありまして御期待に副ふだけの仕事は出来ないだらうと心配して居るのであります。本部の方々、尙關西地方在任の會員諸君の御鞭撻、御助力を得て初めての支部たる名譽を汚さないやうに努めて行きたいと思ひます。唯さう云ふ考を持つて居るだけで、まだどう云ふ風にやつて行かうと云ふやうな抱負等はないのであります。是から追々と幹事並商議員の方々とお相談致しまして仕事をやつて行きたいと思ひます。

尙今度關西支部が出来ましたことは考へて見ますのに誠に其時機を得たものと感ずるのであります。それは我が國の製鐵鋼業の地區的の分布を見ますと、東京、横濱地方、並に大阪、神戸地方と云ふものが東西に丁度伯仲するやうな盛んな地區であります。尤も八幡は是は例外でありまして、ずつと桁が違ひますが、大體鋼の生産額などを見ますと此の京濱地方と、阪神地方は伯仲の間にある、多少阪神の方が多いかも知れませぬ、2~3割は多いかも知れませぬが、まあ大體東西の大關とも言ふべき位置にあるのであります。唯其の阪神地方で是迄甚だ物足りない感じがして居りましたのは一本も熔鑪を持つて居ないことであります。東京地方は夙に澤山の熔鑪が出来て居るのでありますが最近になりまして中山製鋼所の一本だけ出来て、近々其の火入をされるさうであります。それから尼ヶ崎製鋼の熔鑪も基礎に掛られたさうでありますし、尙又大谷製鋼所に於ても準備を進めて居られるさうであります。其の上に尙少し離れて居りますが、此の秋には廣畑の製鐵所に一本熔鑪が出来るさうでありまして、斯うなつて來ますと非常に賑やかな鐵鋼の中心となるのであります。此の際に日本鐵鋼協會の支部があつた地方に出来ると云ふことは誠に機宜を得たことと考へるのであります。さう云ふ意味に於きましても我々の責任は甚だ重いと云ふので、皆さんの御援助に依りまして所期の目的を達するやうに致したいと存じて居ります宜しく御願致して置きます。(拍手)

○齋藤會長 今度は主人側の河村博士に何か御話を願ひます。(拍手起る)

○河村驍君 今夕は先程から澤山テーブル・スピーチがありましたので、私は御遠慮申し上げたいと思つて居りましたのでございますが、折角の御指名がありましたので一二私の希望を述べさせて頂きたいと思ひます。本會の發展狀況並に我國の今日の時局に際しましての鐵鋼界の趨勢に就きましては、今朝通常總會の席上で齋藤會長より誠に機宜を得たる詳しい御話がありました。乃ち本會の發展に就ては、この一年間に會員 2,300人より 3,000人に増加し、會の資産は 26 萬餘圓より 65 萬餘圓に増加し、又會の事業としては、毎年春秋二季に講演大會を開くの外、月並講演會を復活し、4月、10月の大會のある月の外毎月講演會を開く事となり、又從來春秋大會の際

のみ開催して居ました研究部會は、部會内規の改正と共に隨時數種の項目に就て、本會單獨又は他の學會と聯合して研究會を開く事となり、既に夫々施行せられ、若しくは又目下計畫中のものもありまして、其他野田博士記念資金による圖書の購入、鐵鋼要覽の編纂事業の進捗、大阪支部の開設等本會の役員幹部は、日夜努力を續けて居るのでありまして、齋藤會長就任以來、この一年の内に會務會運の劃期的の進展を見ました事は、誠に喜ばしき限りであります、併しながら我々は決して之を以て満足してはならないのであります。俗に志は大きく心は小さくと申しますが、一つ志を大にし、大きな目標を立て、之が達成に、小心翼翼として努力しなければならぬと考へます。私は本會の資産を將來どうしても 100 萬圓以上にしなければならぬと思ひます。又會員の數も今日の倍の 6000 人位迄に達せしめたいと思つて居ります。かくの如く一つの目的を定めて、それに達する様會員一同が、凡ての機會を利用して倦まず弛まず努力すると云ふ事が肝要でありまして、希望といふものは熱心によつて必ず達せられるものと私は信ずるものであります。是が私の第一の希望であります。

次に我國の今次の事變以來鐵鋼事業の發展も、亦實に目覺しきものでありまして、熔鑪の如きも 500t, 600t, 700t, 1000t と云ふ様な大きなものが各地に建設せられ又製鋼壓延の事業もそれに從つて擴充せられ、殊に時局の必要に應じて特殊鋼の増産の爲め電氣製鋼の發達は著敷ものがあり、現在迄に新設豫定爐數は既に百數十爐に達し、それに依て數十萬tの電氣鋼が増加する事と存じます。又原料方面に就きましては、朝鮮滿洲方面の貧鐵處理又北支中支フリッピン南洋等にも着々手が延びて居る様でありますし、又昔から問題になつて居りましたパーブルオアの如きも熔鑪の原料としては勿論の事、今日御講演がありました様にセメントの休轉爐を利用するバツセー法の應用が實施せられ之にも紫鐵が利用せられて居り又豫て懸案の砂鐵の利用に就きましても高周波重工業の富山工場、青森縣大湊の日本特殊鋼管、日本砂鐵工業の高砂其他に於て已に利用せられつゝある様でありますし、又クルップ式のレン法は曩きに昭和製鋼と三菱鐵業との協同で其實施權を獲得し、已に前者は鞍山に於て後者は朝鮮の清津で着々進工中で、清津では已に本月中には第一基の操業を開始する筈であり、又スポンジアイオンの方法も鞍山本溪湖を始め、内地でも各所で研究計畫中であり、此外今日英獨で實施せられて居る處のアシッド・スマルティングの如きも各地の熔鑪で試験せられて居る様に聞いて居ります。又從來隣りの含有の多い鑛石がなくては施行する事が出来ないと思はれてゐたトーマス製鋼法が日本鋼管で立派に操業せられて居るのであります。乃ち從來世界の製鐵界で知られて居た處のもの又は至難とせられた處の製鐵製鋼法も、今日の時局の波に乗つて我國に一齊に勃興して來て或は研究せられ、又は建設せられ實施せられまして、所謂百花爛漫の體を呈して居るの現状であります。是等の施設が凡て出来上つたならば、我國の製鐵事業は英國と覇を争ふの地位に達するものと豫想せらるゝ次第であります。

之に關連しまして日本鐵鋼協會に對する私の第二の希望を申述べますと、本會は鐵鋼に關する學術技術の進歩を計り、之に依り本邦の製鐵事業の振興に資する事を目的とする機關であります。我國の鐵の學術と云ふものは先程色々御話がありました通り諸先生の御指導宜しきを得まして、今日餘程進歩して參りましたが、本會の目的とする學術と技術、詰り學理と實際の作業との兩方が相併行して發達しまして、茲に製鐵事業が盛んになるのでありまして、之の事は先程來御話があつた通りであります。然るに本會に於て發表せらる

講演從つて會誌に掲載せらるゝ論文は常に學術學理に關するものが技術作業に關するものに比較して非常に多いのであります。學術に關するものも無論今後も益々多くなつて宜しいと思ひますが技術に關する講演が今後もつと多くなる事が切望されるのであります。今日は前申上げました様に我國の製鐵界は非常な發展を來しつゝあるものでありますから、之等の技術上作業上の事に就て皆さんの御講演を願ひ御報告を願ふ事が澤山あると思ひます。處が今度の大會に致しまして全體の論文數 33 の内技術に關するものは僅に 3 題程度に過ぎないのであります。本會には俵賞金の制度がありますが、御承知の通り前一年の鐵鋼協會誌に掲載せられた論文の中學術上最も優秀なるもの一人とそれから技術上最も有益なる論文に對して一人と云ふ事になつて居りますが、大部分は學理に關する研究上の論文でありまして、技術に關するもの作業に關するものは五指を屈するに過ぎませぬ。技術に關するものは四つか五つの内から一つ選ぶ一方學術に關するものは五十とか六十の内から一つ選ぶ、かう云ふ事になつて居ります。最も實際の作業は研究室に於ける研究とは異なり何百萬圓、何千萬圓の資本と何千人の人を使ひ二年とか三年の長年月を経て初めて發表する事が出來ると云ふ様な場合もありますから學術の論文程の數は到底得られないとは存じますが、せめて 1/2 とか 1/3 程度迄に技術の論文を多くしたいと云ふ希望を持つて居ります。

是に就ては皆さんの御考もある事と思ひますが私の希望はさう云ふ所にあると云ふ事を附け加へて御參考に供する次第であります。(拍手)

○齋藤會長 次が大分時が経ちましたが、今度は眞打として我が國の鐵鋼界の大元老であられ、尙嬰鑠として實際の仕事などを御監督下つて居ります今泉博士に一つ最後に御話を願ひたいと思ひます〔拍手起る〕

○今泉嘉一郎君 皆様の御承知の如く、我が國には國防及經濟の爲に何としても製鐵事業は必要である。如何なる犠牲を拂つても日本はそれをやらなければならぬと云ふことは既に明治初年我々の先輩先覺者等が熱心に主張して居つたことであります。所が何としても製鐵業をあの際に興すと云ふには有らゆる條件が缺けて居つた。技術、資源、労働、資本、さう云ふものが悉く不完全で到底仕事にならなかつたのであります。處で明治 27 年に日清戦争と云ふのが起つた。この時分の我國の製鐵能力と云ふものは、全國を通じての一年分が今日の一日分にしかならなかつた、夫でも忠勇無比の軍隊の外に外國製でも軍艦や兵器の準備があつたから、戦争には勝つたが、兎も角鐵と云ふものが戦に必要であると云ふことが充分に實感されることになつた。其の結果八幡製鐵所の創立を早めることが出來たやうなものであります。而して私共も先輩の驥尾に附いて八幡製鐵所の建設に着手したのでございますが、到頭日清戦争後 10 年の明治 37 年には日露戦争が起つた。まだ此の時代には我國の製鐵能力が今日の一週間分位になつたに過ぎなかつたが夫でも露西亞と戦

つたのであります。戦は勝つたが、一層痛切に鐵の必要を實感したのであります。更に 10 年を経過して大正 3 年には今度は歐洲大戰になつた。其時非常に鐵材を要することに驚いた。あの時代に於ては鐵の年産力は今の一ヶ月分に近いものとなつたがそれにも拘らず大正 5 年には鐵飢饉の喚びが全國を動かしました。即ち其 5 月には我々全國の主なる工業家が、東京ステーション、ホテルに集合しまして鐵飢饉対策の大協議を開いたことなどがございました。兎も角戦争と云ふものと鐵と云ふものは極めて密接な關係がある。何としても鐵なくしては戦争が出來ないと云ふことを戦争の度毎に痛感して今日に至つたのでございます。

今日は日支事變と申します我が國の歴史に於ても未曾有の大事件である。何時も左様ではございしますが、今回は殊に我が國の興廢に重大な關係を持つ大規模の戦争を相當長年に亙つて行はなければならぬものと考へられて居る。其最後の好果を擧げるにはどうしたら宜いのであるか、殊に物資に關する問題に付ては國民一般の大きい憂慮する所となりました。そこで有らゆる新聞や雑誌の上にて見られる通り、今日の最も重要な問題として取扱はれて居りますことは、日滿支を通ずる資源の問題であります。而して其資源と申す内にも國防上及經濟上最も速かに自給自足を達成しなければならぬものは鐵である、と論じて居ないものは殆んどないのであります。即ち鐵の生産を極力増加すると云ふことが今日の最大急務であると云ふことに皆人が一致して居るのであります。併ながら先程も申しましたやうに、鐵が國防上經濟上如何に重要なものであるかは明治初年に既に先覺者は言つて居り、其の後幾度かの戦争の都度實際の體驗に依つて國民は之を痛感して居るのでありますから、私共のやふに相當古い時代から製鐵の事に關係して居る者と致しましては、今日のやふな、時態が生ずることを常に恐れたのであります。實は今日各方面で言れて居る議論の大半はもう 20 年前に論じ盡したことであります。大正 4 年に此の日本鐵鋼協會が創立されたのもそれが爲であります。まあ兎も角も斯様な時勢になりました以上、我が日本鐵鋼協會としては最大の活動をなさなければならぬ。製鐵事業に關する技術者も經營者も一緒になつて、同心協力我國製鐵事業の振興に努力すると云ふ事を一枚看板として立つて居る我が鐵鋼協會と致しましては今日程緊張を要すべきことは曾て無かつたのであります。即ち我々會員と致しましては今日此の日本の重大時機に際して國家の要望する重大工作の最も大きいパートを擔つて行かなければならぬのであります。でありますから私は茲に會員である皆様方の御健在を切に希ふ次第であります。(拍手)

○齋藤會長 尙御話を願ひたいこともありまするが、8時をちよつと過ぎたやうでありますから是でテーブル・スピーチを終ることと致します。どうか尙是から果物とコーヒーが出来ますから御ゆつくりとどうぞ御願致します。

午後 8 時 5 分閉會